

19世紀ヒヴァ・ハン国の年代記

Khivan Chronicles in the Nineteenth Century

塩谷 哲史

本章は、アム川下流域のホラズム地方にウズベク遊牧集団が成立させたヒヴァ・ハン国（1512～1920年）における歴史書編纂の伝統を論じる。ハン国では、16世紀にはモンゴル帝国後継諸政権の一つジョチ・ウルスの歴史叙述の伝統を継承した歴史書が編纂されていたようだ。19世紀に入って新王朝コングラト朝（1804～1920年）が成立すると、宮廷を中心にペルシア語の文体に倣ったチャガタイ・トルコ語の文語としての整備が進み、それにもとづいた修史編纂事業が継続された。この伝統は、1873年のロシア軍によるヒヴァ占領とハン国の保護国化以降も途絶えることはなかった。ムーニス、アーガーヒー、イシュ・ムラード・アーホンド、サナーイー、カームカール、バヤーニーといった歴史家たちが、ハンの系譜と事績を記した歴史書を編纂した。しかし19世紀末から20世紀初頭にかけて、商業都市ウルゲンチの商人や宮廷の進歩的な有力者たちを中心にイスラム改革派知識人グループである青年ヒヴァ人が生まれ、成長していくと、彼らはハンの統治や宮廷とロシア帝国高官の腐敗を批判した歴史書を著した。1920年青年ヒヴァ人は赤軍の軍事支援を受けてハン国を打倒し、人民共和国を成立させたが、翌1921年には赤軍のクーデタにより政権から追われた。それでも青年ヒヴァ人の中心人物であったユースポフは、ハンとその宮廷に批判的で、大部な歴史書を残している。1920年代ソ連体制の確立とともに、発展段階論に支えられたマルクス・レーニン主義の枠組みの中で、ヒヴァのイチャン・カラ博物館を中心に郷土史家たちがハン国の旧制度について記録を残したが、それらは一般に広く読まれたわけではなかった。1991年ソ連からの独立後、ウズベキスタン共和国のホラズム州では、州レベルから村落レベルまで、数々の郷土史が出版されるようになった。



1. 18世紀に至るヒヴァ・ハン国の修史編纂
2. 19世紀ヒヴァ・ハン国の修史編纂
 - 2-1. ロシアによる保護国化まで
 - 2-2. ロシアによる保護国化以後
3. 20世紀前半ホラズムにおける歴史書
4. おわりに

1. 18世紀に至るヒヴァ・ハン国の修史編纂

16世紀初頭ウズベク遊牧集団の一支がアム川下流域のホラズム・オアシスを占領してヒヴァ・ハン国（1512～1920年）を成立させた。その後、チングス・ハンの男系子孫の一人ヤードガールの血統に連なるハンたちが即位した（アラブシャー朝、1512～1695年ごろ）。しかし実権は、各地に割拠するハンの一族（スルターン）やウズベク諸部族の有力者（アミール）たちに握られ、ハン国は分権的性格が強かった。

ヒヴァ・ハン国における修史編纂の伝統の基点がいつであるのかについて明確にすることはできない。現存する歴史書で確認できる最初の写本は、1550年代に完成したウテミシュ・ハージーの『チングズ・ナーマ』（Ötāmiš Hājī 2008）であろう¹。本書は、チャガタイ・トルコ語²で書かれた、キプチャク（カザフ）草原においてハンに即位したチングス・ハンの子孫たちの事績に関する歴史書であり、ジョチ・ウルスのトクタミシュ（在位1378-1395年）の治世に至る記述がある³。おそらくは、ヒヴァ・ハン国における修史編纂の伝統は当初、キプチャク草原の歴史叙述の伝統を継承したものであったと考えることができよう。

その後、17世紀中葉ヒヴァ・ハン国の英主と称えられるアブルガーズィー・ハン（在位1644-1663/64年）は、『テュルク系譜』（‘Abū al-Ghāzī Bahādur Khān 1970）と『トルクメン系譜』（‘Abū al-Ghāzī Bahādur Khān 1958）の二書を著した。その執筆の動機について、彼自身は以下のように語っている。「我々の父祖たちの思慮のなさ、ホラズムの民たちの知識のなさという二つの理由から、[シャイバーン朝の] アブドゥッラー・ハンの先祖から我々の[先祖が] 分かれたときから、我々に至るまでの我々が集団の歴史書 *tārīkh* は未完である。この歴史を、誰かを招いて書かせようと何度も考えた。[しかし]それに相応な人物は見つけられなかった。[歴史を書くことは]不可欠であった。そのために、朕が書いた」（‘Abū al-Ghāzī Bahādur Khān 1970: 2）。アブルガーズィー・ハンの息

1 校訂本の解題によれば、現在は行方不明となっているトルコの東洋学者・民族運動指導者ゼキ・ヴェリディ・トガンの私蔵写本は、本校訂本が底本としたタシュケント写本よりも内容が豊富であるという。

2 ホラズムにおいては、より正確にはテュルク語と呼ぶべきかもしれない。なぜならホラズムの人びとは、自分たちの言語をチャガタイ・トルコ語ないしチャガタイ語とは決して呼ぶことはなく、テュルキーと呼んだ。

3 ウテミシュ・ハージーが仕えたアラブシャー朝の君主も『ホラズム史』なる歴史書を執筆したという（Ötāmiš Hājī 2008: xxii）。

子アヌーシャ・ハン（在位1663/64-1685年）もまた、ホラーサーンへの軍事遠征やホラズムにおける灌漑事業の振興、文芸活動の保護で知られる英主であった。しかし彼の治世末期から始まった政治的混乱の中で、アラブシャー朝は断絶した。その後ハン国は1770年代に至るまで混乱状態にあった。カザフ草原、マーワラーアンナフルなど周辺地域の出身で、チンギス・ハンの男系子孫と認められた人物が、ウズベク諸部族の有力アミールによってヒヴァに連れてこられ、ハンに即位した。シール・ガーズィー・ハン（在位1714-1727年）やイルパルス・ハン（在位1727-1740年）、ガーイブ・ハン（在位1745-1756年）を除くと、ハンたちの治世は短く、実権はマンギト族やCongrat族などウズベク諸部族の有力アミールたちの手中にあった。こうした状況は19世紀初頭Congrat朝が成立するまで続いた。ブハラの歴史家アブドゥルカリーム・ブハーリーはこうした状況を評して「ハンのすげ替えごっこ」と呼んだ。また1740年にはイランのナーディル・シャーによる軍事征服を受け、ブハラ、カザフの侵入もたびたび起きた。さらに疫病や飢饉が広まり、都市住民が逃散するなど、ホラズムの社会は混乱状態に陥った。そのため18世紀のヒヴァ・ハン国において書かれた歴史書はほとんど現存していない。19世紀の歴史家ムーニスによれば、シール・ガーズィー・ハンの治世に、サイイド・ムハンマド・アーホンドが *Gulshan-i iqbāl* という歴史書を執筆したが、その出来栄を妬んだブハラのウラマーによって、唯一の写本は破り捨てられてしまったという (Shīr Muḥammad Mīrāb Mūnis 1988: 161)。

2. 19世紀ヒヴァ・ハン国の修史編纂

2-1. ロシアによる保護国化まで

1804年ウズベク・Congrat族のエルトゥザル・イナクがハン位に即位して、Congrat朝を創始した。これにより、ヒヴァ・ハン国におけるチンギス・ハンの男系子孫によるハン位の独占は終わりを告げた。この王朝は、1873年ロシア帝国による保護国化、ロシア二月革命による帝国の解体（1917年）を経て、1920年青年ヒヴァ人が赤軍の協力を得てハン国を打倒した「人民革命」まで存続した。

それまでのハン国の分権的な性格は、Congrat朝のもとで集権的な性格を帯びるようになった。そしてCongrat朝の宮廷では文芸活動が盛んになった。とりわけペルシア語文学作品のチャガタイ・トルコ語への翻訳が行われた。翻訳が盛んに行われた理由は何であったのか。翻訳に際して訳者たちはしばしば庶民にも分かる写本の作成をその目的に掲げた。しかし実際にそうした写本は、宮廷の周囲の限られた人々の間でしか流布しなかった (Toutant 2019; Sartori 2020)。トゥタンは、当時のヒヴァ・ハン国が置かれていた政治状況にその理由を求めている。それによると、ヒヴァ・ハン国と政治的対抗関係にあったブハラ・アミール国、コーカンド・ハン国では、ペルシア語が文語としての地位を確立していた。そうした隣接諸国に文化的に対抗するために、Congrat朝宮廷は意図的にすでにホラズムにおいて文章語として用いられていたチャガタイ・トルコ語の普及と文体の洗練化を図ったという (Toutant 2019)。またエルキノフは、ロシアによる保護国化が、Congrat

ラト朝宮廷におけるチャガタイ・トルコ語文学の普及に影響を与えたと論じる。宮廷は、政治的に従属しながらも、ロシアに文化的に対抗するための手段として、写本作成を盛んに行った (Erkinov 2011)。サルトリは、ブハラやコーカンドとの競争以外にも、より広い文脈で、新疆からヴォルガ流域に至るチャガタイ・トルコ語の文章語としての伝統の存在を指摘したうえで、コングラト朝宮廷はそうした環境を利用し、チャガタイ・トルコ語文学の振興を図ったに過ぎないと述べた。そしてあくまで、庶民のチャガタイ・トルコ語使用という社会的環境に合わせて、宮廷はデモティックなものを文学的なものに昇華させたと論じた (Sartori 2020)。

しかしこうした外部や下からの力により、宮廷でペルシア語からチャガタイ・トルコ語への翻訳活動が盛んになったと説明するのは、一見説得力を持つが、より正面から当時のコングラト朝宮廷で行われていたことをとらえる必要もあるだろう。コングラト朝宮廷は、ペルシア語の語彙を取り入れ、その文体を学ぶことで、チャガタイ・トルコ語の文体を洗練させ、宮廷文学を豊かなものにしようとしたのではないか。そしてコングラト朝のハンたちはそうした宮廷文学の庇護者たらんとしたのではないだろうか。ブレーゲルによれば、コングラト朝宮廷においてペルシア語の歴史書をチャガタイ・トルコ語に翻訳したシール・ムハンマド・ミーラーブ・ムーニス (生没1778-1829年) とその甥ムハンマド・リザー・ミーラーブ・アーガヒー (生没1809-1874年) は、当初アブルガーズィーに似た平易な表現で草稿を記したが、のちにそれらをペルシア語文学で用いられる技巧的な表現に変えたという (Bregel 1999: xlvii-xlviii)。ヌールヤグデイ・タシェフは、1841-1842年にアッラークリ・ハンの命令で行われた、アフガニスタン北部ムルガブ流域に居住していたジャムシーデー族に対する軍事遠征に関する歴史書 *Jamshīdī tavāyifī fathī* の著者ダームツラー・イシュ・ムラードに注目し、彼がムーニスやアーガヒーの作品を写しながら、表現を簡素化させたり、逆に凝った表現に変えたりしていたことを突き止め、文章表現の改良を重ねていた例を示している (Toshev 2018: xxi)。このように19世紀前半のコングラト朝宮廷では、ペルシア語文学作品の文体を取り入れ、チャガタイ・トルコ語の洗練された文体作りが目指されていたと考えるべきであろう。

そしてムーニスとアーガヒーは、19世紀初頭から1872年にかけて、チャガタイ・トルコ語で6編のヒヴァ・ハンたちの歴史書を編纂した。ムーニスが執筆を開始した *Firdaws al-iqbāl* は、天地創生からムハンマド・ラヒーム・ハン (在位1806-1825年) の治世までを記述した年代記である。ムーニスは1827年ホラーサーンへの軍事遠征の途上、当時流行していたコレラにかかって亡くなったが、アーガヒーがその遺志を受け継ぎ執筆を続け、1842年までに完成させた。その後アーガヒーは断代史を次々と執筆した。アッラークリ・ハン (在位1825-1842年) の治世に関する *Rīyāz al-dawla* (1844年成立)、ラヒームクリ・ハン (在位1842-1846年) の治世に関する *Zubdat al-tavārīkh* (1846年成立)、ムハンマド・アミーン・ハン (在位1846-1855年)、アブドゥッラー・ハン (在位1855年)、クトウルク・ムラード・ハン (在位1855-1856年) の三人のハンの治世に関する *Jāmi' al-vāqi'āt-i Sulṭānī* (1856/57年成立)、サイイド・ムハンマド・ハン (在位1856-1864年) の治世に関する *Gulshan-i dawlat* (1865/66年成立)、サイイド・ムハンマド・ラヒーム・ハン (在位1864-1910年) の治世初期に関する *Shāhid-i iqbāl* である。最後の *Shāhid-i iqbāl* は、ロシア軍のヒヴァ遠征が行わ

れたために、1872年9月3日までの記述で断筆となった。

こうした年代記の情報源は何であったのか。ムーニスの *Firdaws al-iqbāl* を例にとれば、ムーニスの同時代以前、つまり18世紀中ごろまでの記述は、ペルシア語年代記やアブルガズイー・ハンの『テュルク系譜』などの著作、散逸した年代記、口頭伝承、著者自身の伝聞にもとづいている。一方、コングラト朝の創始者エルトゥザル・ハンの祖父ムハンマド・アミン・イナク（在任1770-1790年）がハン国の実権を握った後の記述は、ムーニス自らの軍事遠征への従軍経験、遠征の報告書、覚書などにもとづいている（Bregel 1999: xxv-1）。おそらくアーガヒーも、ムーニスの情報源と共通の経験、史料にもとづき記述していたと考えられる。

ムーニスとアーガヒーが執筆した年代記は、すでにネジブ・アースム（生没1861-1935年）らオスマン帝国末期から共和国初期のトルコ学者たちに知られていた（Åsım 1912-1913；新井1984: 127, 143）。現在イスタンブール大学図書館には、来歴は不詳であるが、*Riyāz al-dawla* と *Zubdat al-tavārikh* が合冊された写本が所蔵されている⁴。

ムーニスとアーガヒーの年代記は、1873年ロシア軍のヒヴァ占領とハン国の保護国化にともない、サンクト・ペテルブルグにも招来された。ロシアの東洋学者バルトリド（生没1869-1930年）は、「ムーニスとアーガヒーの著作群には、文学作品ないし歴史文献として若干の欠点があるにせよ、その諸著作は記述の詳細さと事実に関する史料の豊富さにおいて、ブハラやコーカンドの諸ハン国の歴史に関する現存の著作群をはるかに凌駕している」と高い評価をしている（バルトリド2011: 273）。そして彼は *Firdaws al-iqbāl* の校訂出版を計画したが、果たせなかった（Bregel 1988: 39-41）。その後ソ連期には、新たに創成されたカラカルバク民族やトルクメン民族の民族史を作り出すために、年代記の一部をロシア語訳した史料集が刊行されたが、それらは年代記の個々の記述の文脈を無視した解釈を生み出した。ソ連解体に前後して、バルトリドの衣鉢を継いだ、ソ連からイスラエルを経てアメリカに政治亡命をせざるをえなかったブレイゲルが *Firdaws al-iqbāl* の校訂本と英訳を出版した（Shīr Muḥammad Mīrāb Mūnis 1988; Bregel 1999）。ここに初めて、ムーニスとアーガヒーの年代記の校訂テキストを、我々が目にすることができるようになった⁵。そしてソ連から独立したウズベキスタン共和国の東洋学を担った中堅、若手の研究者たちが、*Zubdat al-tavrikh*、*Jāmi' al-vāqi' tā-i Sultānī* を校訂し、出版した（Tashev 2012; Nazirova 2016）。

コングラト朝期に花開いたチャガタイ・トルコ語による同時代の年代記編纂の伝統の担い手は、ムーニス、アーガヒー両名にとどまらなかった。先述したダームツラー・イシュ・ムラードは、*Jamshīdī tavāyifī fathī* 以外にも、サイド・ムハンマド・ハンの命令により、*Tārīkh-i Sayyid Muḥammad*

4 本写本については、小松久男先生のご教示およびご厚意によりマイクロフィルムで閲覧できた。ここに記して謝意を表したい。

5 ブレイゲルが校訂、英訳作業時に作成したノート類は、インディアナ大学時代に彼の薫陶を受けたウィリアム・ウッド William Wood が整理し、同大学のウェブサイトに掲載する予定だと聞いている。しかしその作業は、まだ完了していないようだ。

Khānī, Tārīkhcha-yi Muḥammad Ya‘qūb Khvāja を執筆した。後二者の内容は、ムーニスとアーガヒーの年代記の内容とほぼ一致するので、歴史史料としての価値は低いと見られてきたが、イシュ・ムラードは、ムーニスやアーガヒーの文章を注意深く別の単語に置き換えたり、より洗練された表現を用いたりして、これらの作品を編纂している (Toshev 2018: xxi)。この著作はまさにヒヴァ・ハン国におけるチャガタイ・トルコ語による修史事業の発展過程を示す史料であると言えよう。また、ヒヴァの金曜モスクなどでイマームを務め、ペルシア語文学の翻訳や写本作成にも従事したムッラー・バーバージャー・マンギト・サナーイーは *Tavārīkh-i Khvāramshāhiyya* (1864年完成) を著した。本書は、ハサン・ムラード・コシュベギの命令で、ムーニスとアーガヒーの諸著作を人々に読みやすかたにする目的で著された。1929年バルトリドがプロイセン国立図書館で発見した唯一写本は、現在も未公開である (Bregel 1978)。

2-2. ロシアによる保護国化以後

1873年ロシア軍がヒヴァを占領し、ハン国はその保護国となった。ロシアの軍政下に置かれた旧コーカンド・ハン国領とは異なり、ハン国の内政面での自主性は、ブハラ・アミール国ともども保たれたが、実際にはロシア軍の越境や駐留、またハン国内の灌漑事業に対する介入が続いた。そうした状況下においても、コングラト朝宮廷での文芸活動は盛んで、チャガタイ・トルコ語による歴史書編纂の伝統も途絶えることはなかった。エルキノフは、こうした文芸活動をロシアへの文化的な抵抗手段であったと評価しているが、理由はそれだけではないだろう (Erkinov 2011)。まず、ハンとその宮廷を頂点とするハン国の秩序が保たれたことを挙げるができる。サイイド・ムハンマド・ハンの王子で、宮廷史家でもあったサイイド・ハミードジャー・トラ・カームヤーブ (生没1861-1922年) は、自身の著作の1303/1885-86年の記述で以下のように述べている。「ロシア人から何らの圧迫も厄災もない。ロシア人が国土を占領しなかったかのようなのである。もしロシア国に対する属国という名前がなければ、高位の威厳あるハーカーン陛下のご命令は、父祖たちのヤサクとユスンに合わせて、また諸事は、その法に則り行われ、政権もまた父祖たちの時と同じである」 (Sayyid Ḥamīdjān Tūra Kāmyāb: 189ob.-190)。宮廷ではロシアによる保護国化以前と同様、詩人や文人たちが集い、文芸活動を継続することができたと考えられる。またロシア帝国による政治的統合と、交通路の整備により、ヴォルガ・ウラル地方やコーカサスのムスリム知識人、さらにマッカ巡礼とその途次に立ち寄るイスタンブルなどオスマン帝国諸都市の知識人との交流が盛んになった。サイイド・ムハンマド・ラヒーム・ハンの弟イーサー・トラは、多分に政治的な理由もあったと考えられるが、ロシア軍のヒヴァ占領直後にマッカ巡礼を行い、その記録を残した (Toshev 2012)。サイイド・ムハンマド・ラヒーム・ハンは諸写本を集めた文庫を作り、それについてロシアの東洋学者サモイロヴィチらが注目している⁶。一方で当時のヒヴァの宮廷は、西欧由来の先進技術の導入にも積極的で、ブハラ・アミール国よりも早く、1874年にはすでに石版印刷機をロシア経由で入手した

6 サイイド・ムハンマド・ラヒーム・ハンの文庫の目録は、Erkinov, Polvonov, Aminov 2010 を参照。

(Chabrov 1961: 319)。このように、コングラト朝宮廷の継続、他地域のムスリム知識人との交流の拡大、西欧文化への関心の高さはいずれも、宮廷を舞台とした修史編纂を含む文芸活動の活発化に貢献しただろう。

上述のカームヤープの *Tavārīkh al-khavānīn* (1886年以降完成) は、コングラト朝のハンたちの歴史を、完成時点まで、ハン統治世ごとに記述した歴史書である。またムハンマド・ユースフ・ベク・バヤーニー (生没1858-1923年) は、*Shajara-yi Khvārazmshāhī* (1913/14年完成) を著した。本書はイスファンディヤール・ハン (在位1910-1918年) の命令により、執筆が開始された。全16章からなる、天地創生から完成当時までの諸事件の記述である。ムーニスとアーガヒーの年代記からの抜粋部分が記述の大半を占め、ムハンマド・アミン・ハンの治世以降の諸事件については、バヤーニー本人による目撃者からの聞き取りや自身の観察にもとづく独自の記述がなされている。ムッラー・ハサン・ムラード・カームカールの *Gulshan-i sa'ādat* (完成年不詳) は、イスファンディヤール・ハンの治世に関する歴史書である。1916年3月の諸事件 (ジュナイド・ハン率いるトルクメン軍のヒヴァ占領とロシア軍の介入によるヒヴァ解放) に関する記述で中断している。

3. 20世紀前半ホラズムにおける歴史書

以上のように、ロシアによる保護国化以降も、コングラト朝宮廷を中心に、チャガタイ・トルコ語による伝統的な修史編纂は続けられた。こうして書かれた歴史書においては、ハン国の君主であるハンの事績に対する批判的な姿勢はほとんど見られない。しかし青年ヒヴァ人の登場とともに、ハンやコングラト朝宮廷に対して辛辣な批判をする歴史書が現れる。青年ヒヴァ人は、1890年代、ハン国の商業都市ウルゲンチ出身の商人たちや、宮廷の進歩的な人々が形成したムスリム改革派知識人グループである。その1人であったジュマ・ニヤーズ・ハッジ (生年1878/79年) が記した *Risāla* は、イスファンディヤール・ハンの治世に始まり、1919年の事件 (第7回トルキスタン大会のためにモスクワからタシュケントにコミッサールが派遣されてきた事件) の記述の直後で断筆となっている、未完成の歴史書である (Iusupova and Dzhaliyeva 1998: 241)。この歴史書は、イスファンディヤール・ハンの大宰相イスラーム・ホジャ (生没1872-1913年) の暗殺事件は、ハン自らがならず者を集めて組織した事件であると断じ、また宮廷の高官がロシア帝国陸軍省の高官に対して賄賂を贈っていたことを批判的に記すとともに、君主専制を打破しようとした青年ホラズム人 (青年ヒヴァ人のこと) たちの革命精神の高揚を描いている。また、青年ヒヴァ人の中心人物となったパフラヴァーン・ニヤーズ・ユースポフは、おそらく1925年ごろに *Tārīkh* を著した⁷。叙述のスタイルは、ムーニス以来の年代記の伝統を継承している。また執筆動機として、変革の只中にあるホラズムで生じた諸事件を記録しようと考えたが、それに相応しい人物がいなかったために、不肖

7 唯一写本はユースポフの親族の家に保管されており、それをもとに現代ウズベク語転写が出版された (Yusupov 1999)。ただし転写版は固有名詞の誤記が甚だしい。

の身でありながら自ら執筆の労をとったと書かれていて、アブルガーズィー・ハンが『テュルク系譜』に記した執筆動機を彷彿とさせる (Yūsufov: 5-6)。そしてイスファンディヤール・ハンの治世から筆を興し、民族共和国境界画定直後に至るホラズム史が、イスファンディヤール・ハンやハン国宮廷に対する徹底した批判とともに描かれている。

1920年青年ヒヴァ人は赤軍の協力を得て、ヒヴァを占領し、ここにコングラト朝は崩壊し、ホラズム人民共和国が成立した。さらに1921年赤軍のクーデタにより青年ヒヴァ人は政権から追われ、1924年にはモスクワのソ連政府中央が、中央アジアの民族・共和国境界画定を断行し、ホラズムはウズベク、トルクメン両社会主義共和国に分割された。ソ連当局は、ホラズムのウズベク、トルクメン両民族間にあった、とりわけ水資源をめぐる歴史的対立を解消し、経済的に立ち遅れたホラズムの発展を約束すると宣伝したが、当時のロシアの学者や現地の知識人の中には、それが欺瞞であることを見抜いた人々がいた。ロシアの東洋学者バルトリドは以下のように述べている。「ホラズム語とホラズムの民族性は、おそらく13世紀には失われた。しかし、ホラズムはその後も絶えることなく残り、一時的な破壊ののちも、おそらく周囲の地方とは全く異なる、かつてあった独自の日常生活の諸条件に基づいて、すぐにその政治的独自性を復活させた。しばしば流血の惨事になったウズベクとトルクメンの間の敵意さえ、ホラズムの分割という考えに帰結したことはなかった」(Bartol'd 1991: 165)。またユースポフは『歴史』の最後を以下のように締めくくっている。「[1925年2月のウズベキスタン共和国第1回クリルタイから] 数日経って、ロシア人とトルキスタン人の労働者たちが、100人ずつ、50人ずつとやって来始めた。ホラズムの労働者たちは全員解職され、新たにやってきた労働者たちがその職に就いた。ただ地元の労働者たちには御者、車引き、馬の世話人、郵便配達人といった仕事だけが残った。それ以外の高位の職は〔ボリシェヴィキの〕同志たちに独占された」(Yūsufov: 644)。

コングラト朝宮廷の庇護を受けた歴史家や、改革を指向し現状批判を行った青年ヒヴァ人たちにかわり、1920年代にはソ連体制下の環境に適応しながら活躍する郷土史家が現れた。彼らの活躍の舞台は、現在ヒヴァ市に所在するイチャン・カラ博物館であった。初代館長を務めたアブドゥッラー・バルタエフや、ホラズム人民共和国、ウズベク社会主義ソヴィエト共和国の公的機関に勤務しながら、科学アカデミー東洋学研究所の研究者とも親交があったババジャン・サファロフ (生没1891~1983年) はその代表だろう。彼らは、マルクス・レーニン主義の定式に沿った発展段階論の枠組みやスローガンを採用しながらも、ハン国の旧制度の一端を書きとどめた。その叙述の範囲は、宮廷儀礼、税制、水利、奴隷など政治、社会の諸分野に及ぶ⁸。ただしこうした著作は写本やノー

8 これらの貴重な史料は、最近になってようやく一部が公刊され、研究者が利用可能になった。サファロフが1959年、科学アカデミー東洋学研究所の研究者ヨルダシェフ M. Yu. Yoldashev の依頼により作成した「ホラズムにあった奴隷制に関する諸事件」は、Abdurasulov and Toshov 2019に公刊されている。しかしその解説において公刊者たちは、サファロフの記述がソ連の認識論的、イデオロギー的パラダイムの視点から過去を描く性格を有していて、彼の著作の論調、評価方法、ストーリーの選択は、その依頼主、つまりヨルダシェフの期待を先取りしたものであると、読者への注意を喚起している (Abdurasulov and Toshov 2019: 270)。さ

トのかたちで残されており、同時代に広く読まれたというよりは、ウズベク社会主義ソヴィエト共和国史編纂のための資料として利用されたようだ。ホラズム（旧ヒヴァ・ハン国）の郷土史が、州レベルから村落レベルに至るまで広く書かれるようになるには、1991年のウズベキスタン共和国のソ連からの独立を待たなければならなかった。

4. おわりに

今後新たな写本が発見される可能性があり、その前に結論を下すことは早計であるが、16世紀初頭ホラズムに成立したヒヴァ・ハン国において、17世紀に至るまでチャガタイ・トルコ語で、チンギス・ハンに連なる系譜と、その子孫にあたるハンたちの事績を記す歴史書を編纂する伝統があった。

18世紀の混乱期を経て19世紀初頭ハン国に新王朝コングラト朝が成立すると、ペルシア語文学作品や歴史書のチャガタイ・トルコ語への翻訳が盛んに行われ、新たなチャガタイ・トルコ語の文体創出が行われた。年代記もまた、前代と同じように、チャガタイ・トルコ語でチンギス・ハンに連なる系譜やハン的事績を記したが、それに加え、ウズベク諸部族の一有力者に過ぎなかったコングラト朝ハン祖先たちが、いかにチンギス・ハンの血統に連なるハンたちの治世に貢献したかを、潤色や強調を加えて記述した。さらに、ペルシア語の語彙や文体が取り入れられ、ペルシア語、チャガタイ・トルコ語の歴史書、遠征の報告書、種々の覚書といった多様な情報源にもとづき書かれるようになった。こうした修史編纂の伝統は、1873年ロシア軍のヒヴァ占領とハン国の保護国化以降も途絶えることなく、20世紀初頭まで続いた。

1890年代、ハン国の商業都市ウルゲンチ出身の商人たちや、宮廷の進歩的な人々が、ムスリム改革派知識人グループである青年ヒヴァ人を形成し始めた。1917年の2度の革命でロシア帝国が崩壊し、ボリシェヴィキが権力を掌握し、旧ロシア帝国領の回収に向け、ソ連体制を確立していく過程で、1920年ハン国は滅亡し、1924年には旧ハン国領であったホラズムはソ連を構成するウズベク、トルクメン両社会主義共和国に分割された。青年ヒヴァ人は1920年ハン国の打倒の立役者になったが、1921年早くも赤軍のクーデタにより政権から追われた。彼らがどの時点から、コングラト朝宮廷への批判を強めたかは、今後の考察が必要である。しかしジュマ・ニヤーズ・ハッジやパフラヴァーン・ニヤーズ・ユスポフら青年ヒヴァ人のメンバーたちは、年代記の伝統的枠組みを継承しつつ、マルクス・レーニン主義の言葉も借りながら、ハン国の圧制を批判した。そして

らに Bregel' 1972 は、ヨルダシェフのヒヴァ・ハン国の土地制度、税制に関する著作が、おびただしい史料の誤訳、統計情報の捏造、史料の記述を拡大解釈した一般化に満ちていることを立証した。当時の歴史研究の環境において、当局の検閲のもとで研究者たちが発展段階論に沿った議論を史料から強引に導かざるを得なかった点を考慮したとしても、現在こうした研究とその情報源となった史料に対しては、再検証をする姿勢で臨まなければならないことを痛感させられる。

1924年からソ連政府中央が断行した中央アジアの民族・共和国境界画定の過程で起きたホラズムの分割後には、マルクス・レーニン主義の発展段階論の枠組みの中で、イチャン・カラ博物館を拠点に活動した一連の郷土史家たちが現れた。

このように、チンギス・ハンの血統に連なるハンの系譜と事績を記したヒヴァ・ハン国の年代記は、19世紀コングラト朝宮廷で盛んに行われたペルシア語からの翻訳活動により、ペルシア語の語彙、文体を取り入れたチャガタイ・トルコ語で書き継がれた。それはさらに、青年ヒヴァ人の登場によって、内容をハンの系譜と事績からハンへの批判へと変えていった。しかしハンとその宮廷への賛辞からそれらへの批判へと歴史叙述のあり方が転換しても、1920年代ソ連体制の成立とともにホラズム（旧ヒヴァ・ハン国領内）では、近代歴史学に特徴的な批判的実証史学の確立の方向に向かうことなく、政治・思想上の統制のもと、発展段階論に支えられたマルクス・レーニン主義の修辞と論法を用いた歴史叙述に甘んじざるを得なかった。今後ソ連期の現地の歴史家たちが、こうした修辞と論法を利用せざるを得ない状況下において、いかにヒヴァ・ハン国、ホラズムの歴史を書こうとしたのか、という点を明らかにする必要がある。

参考文献

- 新井政美 1984 「「トルコ協会」の設立とその活動—*Türk Yurdu* 創刊前史—」『東洋学報』65(3/4): 271–311.
- ウテミシュ・ハージー著、川口琢司・長峰博之編、菅原睦校閲 2008 『チンギズ・ナーマ』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 塩谷哲史 2019 「19世紀コングラト朝ヒヴァ・ハン国の君主像」小松久男・野田仁編『中央ユーラシアの眺望—近代中央ユーラシア史研究の新展開—』118–139, 山川出版社.
- バルトリド、V. V. 著、小松久男監訳 2011 『トルキスタン文化史』上, 平凡社.
- Abdurasulov, U. and N. Toshov. 2019. “Soviet ‘Local’ Knowledge: Babajan Safarov’s Notes on Slavery in Khwarazm.” *Aus den Tiefenschichten der Texte: Beiträge zur turko-iranischen Welt von der Islamisierung bis zur Gegenwart* (N. Purnaqqheband and F. Saalfeld eds.), 265–292, Wiesbaden: Reichert Verlag Wiesbaden.
- [‘Abū al-Ghāzī Bahādur Khān] 1958. *Rodoslovnaia turkmen [Shajara-yi Tarākima]: Sochinenie Abu-l-Gazi, khana khivinskogo*. A. N. Kononov (ed.), Moscow, Leningrad: Izdatel’stvo Akademii nauk SSSR.
- [‘Abū al-Ghāzī Bahādur Khān] 1970. *Shajara-yi Türk, Histoire des Mongols et des Tatares*. publiée, traduite et annotée par le Baron P. I. Desmaisons, St. Leonards: Ad Orientem.
- Âsim, N. 1912-1913. “Firdevs’ül-Ikbâl.” *Türk derneği*, II: 68–72; III: 81–86.
- Bartol’d, V. V. 1991. “Zapiska Akademika V. V. Bartol’da po voprosu ob istoricheskikh vzaimootnosheniakh

- Turetskikh i Iranskikh narodnostei Srednei Azii." M. Olimov "V. V. Bartol'd o natsional'nom razmezhevanii v Srednei Azii," *Vostok*, 1991-5: 162–167.
- Babadjanov, B. M. 2020, *Epigraphy in the Architectural Cityscape of Khiva: Mosques, Madrasas, Burial Complexes, Courts and Gates*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Bregel, Y. 1978. "The Tawārīkh-i Khōrazmshāhīya by Thanā'ī: The Historiography of Khiva and the Uzbek Literary Language." *Aspects of Altaic Civilization: Proceedings of the XVIII PIAC, Bloomington, June 29–July 5, 1975* (L. V. Clark and P. A. Draghi eds.), 17–32, Bloomington: Asian Studies Research Institute, Indiana University.
- Bregel, Y. 1982. "Tribal Tradition and Dynastic History: The Early Rulers of the Qongrats according to Munis." *Asian and African Studies*, 19: 357–398.
- Bregel, Y. 1988. "Introduction." *Firdaws al-iqbāl: History of Khorezm* (Y. Bregel ed.), 1–60, Leiden, New York: E.J. Brill.
- [Bregel, Y.] 1999. Shīr Muḥammad Mīrāb Mūnis and Muḥammad Rizā Mīrāb Āgahī, *Firdaws al-iqbāl: History of Khorezm*. Translated from Chagatay and annotated by Y. Bregel, Leiden, Boston: Brill.
- Bregel', Iu. 1961. "Sochinenie Baiani «Shadzhara-ii Khorezmshakhi» kak istochnik po istorii turkmen." *Kratkie soobshcheniia Instituta narodov Azii*, 44: 125–157.
- Bregel', Iu. 1972. "K izucheniiu zemel'nykh otnoshenii v Khivinskom khanstve (istochniki i ikh pol'zovanie)." *Pis'mennye pamiatniki Vostoka. Istoriko-filologicheskie issledovaniia. Ezhegodnik 1969*, 28–103, Moscow: Nauka.
- Chabrov, G. N. 1961. "U istokov Uzbekskoi poligrafii: khivinskaia pridvornaia litografiia 1874-1910 gg.." *Kniga issledovaniia i materialy: Sbornik IV*, 317–329, Moscow: Izdatel'stvo vsesoiuznoi knizhnoi palaty.
- Erkinov, A. 2011. "How Muhammad Rahim Khan II of Khiva (1864-1910) cultivated his Court Library as a Means of Resistance against the Russian Empire." *Journal of Islamic Manuscripts*, 2: 36–49.
- Erkinov, A., N. Polvonov, and H. Aminov 2010. *Muhammad Rahimxon II Feruz kutubxonasi fehristi*. Toshkent: Yangi asr avlodi.
- G'anixo'jaev, F. 1986. *Ogahiy asarlarining tavsifi (katalog)*. Toshkent: O'zbekiston SSR Fanlar akademiyasi H. S. Sulaymanov nomidagi qo'lyozmalar instituti.
- Iusupova, D. Iu. and R. P. Dzhalilova (eds.) 1998. *Sobranie vostochnykh rukopisei Akademii nauk Respubliki Uzbekistan: Istoriiia*. Tashkent: Fan.
- Jum'ā Niyāz Ḥājji Khvārāzmi al-Khīvaqī b. Bābā Niyāz, *Risāla*. Institut vostokoveniia Akademii nauk Respubliki Uzbekistan, Manuscripts, inv. no. 7568.
- Muḥammad Rizā Mīrāb Āgahī, *Gulshan-i dawlat*. Institut vostochnykh rukopisei Rossiiskoi Akademii nauk, Turkish manuscripts, inv. no. B1891.
- Muḥammad Rizā Mīrāb Āgahī, *Jāmi' al-vāqi'āt-i Sulṭānī*. Institut vostochnykh rukopisei Rossiiskoi Akademii

- nauk, Turkish manuscripts, inv. no. E-6, ll. 441ob.–522ob. (校訂: Muḥammad Rizā Mīrāb Āgahī, *Jāmi' -i vāqi'āt-i Sulṭānī*. Edited in the Original Central Asian Turki with an Introduction and Notes by Nouryaghdi Tashev, Samarkand, Tashkent: International Institute for Central Asian Studies, 2012.)
- Muḥammad Rizā Mīrāb Āgahī, *Riyāz al-dawla*. İstanbul Üniversitesi, Türkçe Yazmalar, N. 82, ff. 524b–758a.
- Muḥammad Rizā Mīrāb Āgahī, *Shāhid-i iqbāl*. Institut vostochnykh rukopisei Rossiiskoi Akademii nauk, Turkish manuscripts, inv. no. C 572.
- Muḥammad Rizā Mīrāb Āgahī, *Zubdat al-tavārīkh*. İstanbul Üniversitesi, Türkçe Yazmalar, N. 82, ff. 758b–865b. (校訂: Muḥammad Rizā Mīrāb Āgahī, *Zubdat al-tavārīkh*. Edited in the original Central Asian Türkī with an Introduction and Notes by Khilola Nazirova, Tashkent, Samarkand: International Institute for Central Asian Studies, 2016.)
- Muḥammad Yūsuf Bīk Bayānī, *Shajara-yi Khvārazmshāhī*. Institut vostokovedeniia Akademii nauk Respubliki Uzbekistan, Manuscripts, no. 9596.
- Mullā Bābājān b. Mullā Khudāy Bīrdī Bīk Manghit Thanā'ī, *Tavārīkh-i Khvārazmshāhiyya*. Staatsbibliothek zu Berlin, Or. 4^o 1605.
- Mullā Ḥasan Murād Qārī Kāmkār, *Gulshan-i sa'ādat*. Institut vostokoveniia Akademii nauk Respubliki Uzbekistan, Manuscripts, inv. no. 7771.
- Munirov, Q. 2002. *Xorazmda tarixnavislik (XVII–XIX va XX asr boshlari)*. Toshkent: G'afur G'ulom nomidagi Adabiyot va san'at nashriyoti.
- Nazirova, Kh. 2016 “Introduction.” *Zubdat al-tavārīkh* (Kh. Nazirova ed.), v-lxix, Tashkent, Samarkand: International Institute for Central Asian Studies.
- Ötāmiš Ḥājī 2008. *Čingīz-nāma*. Introduction, annotated Translation, Transcription and Critical Text by T. Kawaguchi and H. Nagamine, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Sartori, P. 2020. “From the Demotic to the Literary: The Ascendance of the Vernacular Turkic in Central Asia (Eighteenth–Nineteenth Centuries).” *Eurasian Studies*, 18: 213–254.
- Sayyid Ḥamīdjān Tūra Kāmyāb, *Tavārīkh al-khavānīn*. Institut vostokoveniia Akademii nauk Respubliki Uzbekistan, Manuscripts, inv. no. 7717.
- Shīr Muḥammad Mīrāb Mūnis and Muḥammad Rizā Mīrāb Āgahī 1988. *Firdaws al-iqbāl: History of Khorezm*. Y. Bregel (ed.), Leiden, New York: E.J. Brill.
- Tashev, N. 2012. “Introduction.” Muḥammad Rizā Mīrāb Āgahī, *Jāmi' al-vāqi'āt-i Sulṭānī*. Edited in the Original Central Asian Turki with an Introduction and Notes by Nouryaghdi Tashev, iv–xxv, Samarkand, Tashkent: International Institute for Central Asian Studies.
- Toshev, N. 2012. “Khorezmskii prints 'Isa Tora i ego novonaidennoe Saiakhat-nama.” *Istoriografiia i istochnikovedenie srednevekovogo Vostoka*, 205–207, Baku: Elm.
- Toshov, N. 2011. “Xiva xonlari titulaturasi.” *Sharqshunoslik*, 15: 73–85.
- Toshov, N. 2018. “Introduction.” *Jamshīdī ṭavāyīfī fathī (The Subjugation of the Jamshīdīs)* (N. Toshov ed.),

11–47, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Toutant, M. 2019. “De-Persifying Court Culture: The Khanate of Khiva’s Translation Program.” *The Persianate World: The Frontiers of a Eurasian Lingua Franca* (N. Green ed.), 243–257, Oakland, California: University of California Press.

Yūsufov, Pahlavān Niyāz Hajjī, *Tārīkh*. Private Collection of Yusupov’s Family in Khiva.

Yusupov, P. N. H. 1999. *Yosh Xivaliklar tarixi (xotiralar)*. M. Matniyozov (ed.), Urgench: Xorazm nashriyoti.